
メタボ

宇ノ鹿 すい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メタボ

【Nコード】

N09400

【作者名】

宇ノ鹿 すい

【あらすじ】

ああああああああああ。

「きもちわりい」

と言いながら、嘔吐していた。

それを傍目に見ながら、私はビニール袋を渡しそびれたことだけ後悔しながら、彼の苦しみを分けてもらえたらな、とも思った。

だけど、その時には私も余裕があったわけではなく、むしろ、しんどかった。助けて欲しいくらいのものだった。だから、仕方が無かったのだ。彼が倒れたその時も、仕方が無かった。

「ああ、……し……」

気絶してしまった時に、辺りは一面、夕方。真っ赤な感じになっている。

樹が周辺に何本もあつて、それは紅葉が今絶好調で、本当に紅い。眩くて涙が出そうになるくらいに、その時私と彼の世界はとも真っ赤だった。

道端に倒れている彼に、手を差し伸べたけれども、もう手を出す気力さえも、彼には残されていないようにも見えた。だから私は、焦った。

時間が経過していく。

彼の命がゆっくりと灯火が、失われている。

向こうから人。

メタボ。

「なにか」

「無理、俺、よくわからん、医療系は」

素早い否定とともに去りぬ。

時間が経過していく。夜になる。

彼が冷えた。夜になって、冷え切っていた。

砂浜に供養。

置くとサラリと砂と同化していく。適応していく。

蠍も何も見当たらない。月も何も見当たらない。砂浜に蟹もいない。

サザエの抜け殻みたいのはあった。よくわからない。

向こうで波が、ざざーと鳴っている。むかつく。いらつく。

殺したいと思った。波を殺したい。

どう考えても無理というか、無駄だった。

シャベルしか持っていなかったのに、掘って掘って掘りまくっていた。

やがて朝日が昇る頃には、私も全身が冷え切っていた。カチンコチンで、関節のそこら中が軋んでいる。痛みが激しくて嘔吐したくもなる。頭痛がして、お腹が痛い。向こうがわではチャキチャキ楽しんでる野蛮な集団。殺される気がして恐怖感が途端に湧き出して、逃げ出そうと決意した。

もう、供養も、終わった。

時間が経過していく。

いろいろとダメになっていた。

向こうから人も来ない。

ずっと樹がたくさんあるところで、全部枯れてしまっていた。

葉がどれも落ち葉。紅葉が静まっていて、どこもかしこもやる気が無い。

メタボの人が向こうにいた。

「無理、よくわからん、医療系は」

同じことを言われる。病人に見えたのだろうか、私が。

そりゃそうだ。近頃、ずっと虫しか食べていないのだ。顔も虫に

近づいているのではないだろうか。

それは動物じゃない。虫だ。だから病気にみえてもおかしくはない。

そんなことをしている内に、おいしい匂いが何処から、漂ってきたのだ。

「ああ、…ア……」

メタボが駆け出して、やがて、帰ってこなくなった。

彼が座っていた丸太に、私は代わりに座り込んだ。次は私の番ではないか、と思いながら。

樹は枯れたまま。空は夜のまま。

朝日が昇るころには、眠くなっていて体ももう動かす気にならない。樹になりたい。気にならない。樹になりたいなあ、と思索していた。

すると、向こう側からスッキリした顔の人。メタボだった。かつての。

殺した。そいつを殺した。首を絞めて殺したのだ。

なぜ殺したのかと樹に尋ねられたときに、そりゃ、一言では言い表せないよ、と語る。

最悪なのはわかっていた。だから、樹と同化するための縄を持ってきたのだ。

そこから先。

メタボのおっさん被害者。

巻き込まれただけの被害者。

メタボのおっさん可哀想。

巻き込まれただけの被害者。

メタボのおっさんメタボのおっさん

メタボのおっさんメタボのおっさん

メタボのおっさん被害者。

巻き込まれただけの被害者。

メタボのおっさん可哀想。

巻き込まれただけの被害者。

メタボのおっさんメタボのおっさん

メタボのおっさんメタボのおっさん
メタボのおっさん被害者。
巻き込まれただけの被害者。
メタボのおっさん可哀想。
巻き込まれただけの被害者。
メタボのおっさんメタボのおっさん
メタボのおっさんメタボのおっさん

目を覚ますと彼がいた。

彼がにっこりと笑っているけれども、彼はもう骨だけだった。
私も骨だけだった。どうしようもない。

どうしようもない。

どうしようもない。

どうしようもないのだ。

どうしようもないのだ。

死んでもどうしようもないのだ。

生きていてもどうしようもないのだ。

だけどどうにかするのだ。

そのためにはどうすればいいのだ。

骨しかないのだ。

皮がないのだ。脂肪がないのだ。肉がないのだ。

眼球がないのだ。

どうにかしよう。

どうにかしよう。

どうにかしよう。

どうすんの！

「じゃあまずは、資格から取ってみようか」

「うん。そうしよう。頑張ろうね」

「企業に入るためにね」

「働いて、飯食おう！」

うがががががががががががががががが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0940o/>

メタボ

2011年11月13日08時32分発行